

平成26年(ヨ)第36号 川内原発稼働等差止仮処分命令申立事件

準備書面3
(訂正)

平成26年7月23日

鹿児島地方裁判所 民事第3部 御中

債権者ら訴訟代理人

弁護士 森 雅 美

同 板 井 優

同 後 藤 好 成

外

第1 仮処分申立書における誤記等の訂正

1 「固有周期」(56頁・10行目及び11行目) → 「周期」

(「固有周期」の「固有」は不要ゆえ、削除)

2 144頁の下から3行目

(誤)

甲28・川内・玄海原発「震源を特定せず策定する地震動について」

(正)

甲29・「高浜発電所・大飯発電所 震源を特定せず策定する地震動について」・48頁

3 145頁の下から5行目

(誤)

甲28・川内・玄海原発「震源を特定せず策定する地震動について」

(正)

甲29・「高浜発電所・大飯発電所 震源を特定せず策定する地震動について」・45頁

第2 仮処分申立書の103頁の差し替え

仮処分申立書の103頁を、次頁のものと差し替える。

(2) 平成19年能登半島地震のパラメータと入倉レシピの比較

この断層面積での平均像を示す入倉レシピによる計算結果と比較すると、次のとおりである。

この断層面積での平均像を示す入倉レシピによる計算結果と比較すると、次のとおりである。

平成19年能登半島地震のパラメータと入倉レシピの比較

入倉レシピ

断層面積S	地震モーメント M_0	平均応力降下量	アスペリティの応力降下量	モーメントマグニチュード M_w
286.3	3.89061E+25	1.95653E+22	8.89334E+22	6.326678217

平成19年能登半島地震

286.3	1.36E+26	6.84E+22	20.0E+22 (20.0MPa)
			10.0E+22 (20.0MPa)

上の値からして、平成19年能登半島地震は、地震モーメント及び平均応力降下量で、平均の3.5倍となっている。ただし、アスペリティの面積が33%と平均(22%)よりも大きいことから、アスペリティの応力降下量は、平均の2.25倍にとどまっている。いずれにしてもこの地震は平均像の地震ではないことがわかる。また上の表「設定した断層パラメータ」をみるなら、2つのアスペリティで、応力降下量が大きく違うことがわかる。

ちなみに、中越沖地震でも、下記のとおり3つのアスペリティの応力降下量は、すべて同じというわけではなかった。

設定した震源断層モデルの緒元

	Rupture start point	Depth (km)	M_0 (Nm)
ASP1	(4,3)	10.0	1.69×10^{18}
ASP2	(5,2)	8.3	1.69×10^{18}
ASP3	(4,5)	11.3	1.02×10^{18}
	L (km) × W (km)	$\Delta\sigma$ (MPa)	Risetime (second)
ASP1	5.5 × 5.5 (N:5 × 5)	23.7	0.5
ASP2	5.5 × 5.5 (N:5 × 5)	23.7	0.5
ASP3	5.04 × 5.04 (N:9 × 9)	19.8	0.45

以上